

私の「最後の本」

たぶん、これは私の最後の本です。そのつもりで出版していただきました。で、このエッセイ集の10カ月前に、最後の小説集を、同じ田畑書店から出版していただきました。自分なりに小説というものを大事に思って、長く書き続けてきましたが、その結果、それなりの自分の決めたゴールにたどりついたような気がしたので、「小説」というタイトルで一冊にまとめたものです。自分の思う小説はこういうもので、長い間書いてきても、漠然とした理想のイ

メージは変わらなかつたし、イメージに近いものができたので、終わりにしよう、と自然にそんな気がしましたので。それで、小説以外の短い文章が山のように残っていることに気がつきました。エッセイの類ですが、これは私の場合、小説を書いたおまけのようなもので、小説を書かなかつたら、エッセイを書く機会はなかつたはずです。小説を書くことにしか興味があつたので、小説だけは本能的に一所懸命に書きま

小説家

増田みず子

ますだ みずこ

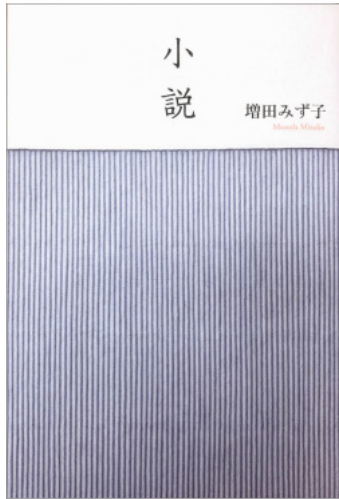


時の調べ
Essay

すが、小説以外では、なにを書くにしても悪戦苦闘するしかなくて、本当に苦手な作業でした。あとになってもめったに読み返すこともなくて、反省して練習することもしませんでした。小説が得意ということはありませんが、好きと苦手が小説とエッセイでした。

でも、今回、小説を書き終えて、人生の整理をするような気持ちで残されたエッセイ群を最後の別れのようにあらためて読み返してみたら、驚いたことに、想像とまったく異なる景色が見えてきました。

小説に関する文章、文科と理科の違いに関する文章の類が意外に多くて、それは熱心に書かれている



上に、小説の文章より迷いがなくて、楽しそうでした。そんなことを思っていたら、田畑書店の編集者氏から、理系のエッセイ集をつくらう、とテレビ番組みたいに声がかかりました。

小説は想像と妄想で書きますけど、理系のエッセイは経験で書きました。小説のことはいつも思っているのですが、あまり迷うことはありません。そういうわけで、このエッセイ集で書いた文章は、素の私がつ作者です。小説のなかの私より素の私の方がしつかりしています。

ほぼ30年分の文章ですが、ほとんど変化がありません。30年かけて自分の理想に近い小説が書けたのはとても嬉しいです。30年分の経験と知識が必要だったのかと思います。

おまけに見えて実はこちらが本当の主人公だったのかと思えます。順調に30年分の成長を遂げたのだと誇っていいでしょうか。本人としては満足です。

今後のことは考えていません。今までも自分で決めたことは、小説を書く、ということだけで決まりました。何か自然な波が来たら、そのときに判断します。文章はふしぎです。書きたい気持ちが生まれれば、その書きたい気持ちにつられて、次第に一直線になってゆきます。一直線になったら書く、それだけです。

略歴

1948年、東京に生まれる。
東京農工大学農学部卒業。77年「死後の関係」が新潮新人賞の候補となり、その後「個室の鍵」「桜寮」「ふたつの春」が連続して芥川賞候補(その後も合わせて計6回となるなど)して、小説家としてデビュー。85年、「自由時間」(新潮社)で野間文芸新人賞、86年、「シングル・セル」(福武書店)で泉鏡花賞、92年、「夢虫」(講談社)で芸術選奨文部大臣新人賞、2001年、「月夜見」(講談社)で伊藤整文学賞をそれぞれ受賞する。著書として他に、「自殺志願」「降水確率」(以上、福武書店)、「鬼の木」「火夜」(以上、新潮社)、「夜のロボット」「水鏡」(以上、講談社)、「禁止空間」「風草」(以上、河出書房新社)ほか多数。

細胞

人によって様々ではあるだろうが、小説を書くために必要なものというのはいくつかあると思う。小説を書き出すためのきっかけと、いいし、発想のための踏み台と、いいようなものだ。

私の場合は、何を大事に思っ暮らしているか、という自覚。とくに気になっているのが、生き物のこと。生命観という言葉に置き換えてもいい。価値観または美意識でもいいけれど、とにかくその基本は生命にたいする姿勢のようなものであるらしい。

そして私の抱いている生命のイメージというのは、細胞のイメージがもとになっているような気がする。

長く退屈だった学校生活で、細胞に関する授業を聞いたときだけ、こちらのアンテナが珍しく敏感に働いたような記憶もある。何か体のなかの大事な部分が刺激されて、ささやかな化学変化のようなものを起こし、消えない跡が残ったようである。

おおげさなことではないけれど、その記憶が、生命の謎へ私の関心をつないでくれたと思う。むろん、のちに『シングル・セル』というもっともらしい題名の長編小説を書くとは、考えてもみないことだったけれど。

ともかく細胞という言葉を知ってから、それ

をひとつ覚えのように、生命を考えるときの足掛かりにしてきたような気がする。

顕微鏡を使い、玉葱の細胞をはじめて見たときの奇妙な興奮は、いまでも記憶に鮮やかだ。ふしぎの国の入口に立ち、おそろおそろ奥をのぞきむような感覚。そこに、思いがけなく広々とした感じで開けていた世界の美しかったこと。

やがて私は、魔法使いになった気分を味わえる機会にも恵まれた。東京農工大学に進学して植物病理学を専攻した三、四年生のとき、ただの葉っぱのきれはしから完全な植物をつくり出した。最近もてはやされているクロロンのことだ。なぜ、葉の破片が、根も葉も茎も備えたちゃんとした植物に育つのか、とうとう理解できな

いままだった。

その後も似たような経験が続いた。方法や技術の進歩が先行し、いろいろな難しい実験も可能になり、たくさんデータが出る。でも、生命は気まぐれでつかみどころがない。謎は謎のまま少しも解明されたという気分にはならない。

細胞は生命を構成するユニットというふうには私に覚えていたわけだが、イメージの方は小説を書くようになってからはめちやくちやになっている。自分勝手に思い描いているのは、生命というのは光りのようなもので、細胞とは一種工場で大量生産された精密な機械の部品、というようなことだ。その思いこみにはもちろん何の根拠もないし、自分自身、どこから湧いたものかわけがわからない。だがそれが、私が生命

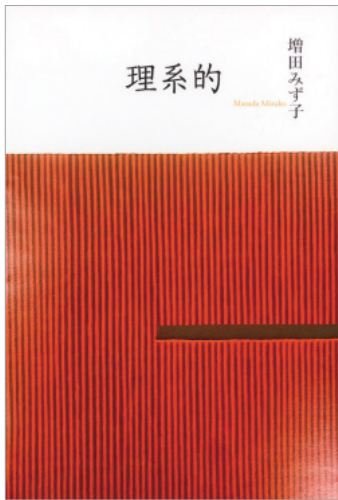
時の調べ
Essay

のイメージを抱く合図のような役に立っているのだし、人にいうわけでもないのだから、好きないようにしていよう、とも思っている。

おかしなものである。私自身もちゃんと生きている一個の生物なのに、その私が「生命」をふしぎがり、理解できずにもどかしがっている。なんだかこっけいな矛盾だ。だが生命というのは、そういうおかしなものだという気が、だんだんしてくる。

無数にいる人間のひとり。無数にある生命のひとつ。自分が生まれてくる以前に、無数の命が生まれ、そして死んでいった。そうして次々と新しい生命が、先行した生命のコピーとして生まれてくる。コピーではあるけれど、独立した別の個性を持つ生き物たちとして育ち、やがてまたコピーを残して死んでいく。

そのようなことを漠然とでも考えていると、



神妙な気持ちになってくる。そしてなぜか、目に映る景色が美しく色鮮やかに感じられてくる。生まれる前のことや死んだあとのことを思うと、心が広くなり、優しくなれるような気がしてくる。つまり、自分がこの世界という大きな生き物の、細胞の一個になったような気分、といえはいいのだろうか。

自分が結局は可愛いように、そう思うと、この世界を何とか好きになれそうな気がしてくるのだ。

私は、せつかく生まれて生きているのだから、この世のなかのことも自分のことも、できれば好きになった方がいいと思っている。だから、なるべく命のことを考えて暮らすようにしているし、その方がどうやら小説も書きやすいようだ。整然と並ぶビルの窓を、細胞のイメージに重ねるのも楽しい。磨きあげられたばかりのガラス窓が、朝日や夕日を浴びて輝いている美しい姿。でも、その窓の奥で何が起きているか。何が起きてもふしぎはないし、何もおきなくてもおかしくない。でも想像力を働かせて、窓のひとつひとつに別々の物語を思い浮かべることが出来る。

今の私は、科学に命のふしぎさが解明できるとは思わなくなっている。

小説でそのふしぎさと向かいあっている方が楽しいと思うようになってしまったし、それでよかったとも思っている。

〔エッセイ集〕『理系的』より転載

『理系的』

2021年9月16日発売予定
四六判仮フランス装 / 320ページ

『小説』

好評発売中
四六判仮フランス装 / 288ページ

田畑書店ウェブサイト <http://tabatashoten.co.jp/>